

すばらしき“みえ”

FOR NICE COMMUNICATION

2018.12
207号

■特集／みえの巨樹を巡る

●いま、グループネット／三重県スポーツ吹矢協会(津中央支部) ●ふるさと再発見／伊賀市丸柱



みえの巨樹を巡る

長年の風雨に耐え、悠久の時を経て
今なお、大地にしっかりと根を張る巨樹。
その姿にはゆるぎない風格と
人を癒す力が宿っています。
今回は、県内で見られる代表的な巨樹〔国・県指定天然記念物〕を
言い伝えとともに紹介していきます。

●取材文／椋木 敬子 ●写真編集／平田 晃・高野 寿司



長太の大楠

山奥の神社に立つ

〔桑名市多度町美鹿544〕

美鹿の神明杉

びろく しんめいすぎ

■お問い合わせ

桑名市観光文化課

☎0594・24・1361

美鹿地区の最も奥深い場所に、スギやクスノキなどの大木が生い茂る大杉神社があります。そのなかで、拝殿の横でひと際目立つ大スギが、美鹿の神明杉です。この大スギは、地上2メートルのところから、幹が大きく二股に分かれています。これは、1本の木が分かれたのではなく、2本のスギが融合したと思われる。太い幹から2本のスギが真っ直ぐに伸び、スクッと立つ姿に、凛とした美しさを感じます。

あまてらすおおみかみ

大杉神社の主祭神は、天照大神です。神明社として昔から地域の人々に親しまれ、古くは大杉神明宮と称されていました。神明杉という名も、そこからきたのでしょう。



拝殿の左脇に立つ、美鹿の神明杉

う。人々が神明杉を敬い、心の拠りどころとしてきたことが、大杉神社の名からも伺えます。

田園に立ち続ける

〔三重県鈴鹿市南長太町2889〕

長太の大楠

なが おおくす

■お問い合わせ

鈴鹿市文化財課

☎0594・3829031

近鉄名古屋線・長太^{なが}浦^{うら}駅と箕田^{みだ}駅の間あたり。田園が広がる平野に1本だけそびえ立つ巨樹が、長太の大楠です。まわりに遮るものがないため、その姿は少し離れた車窓からもはっきりと目に留まるほど。樹齢は不明ですが、樹高は26メートル[※]、枝張り[※]は東西・南北に30メートル以上と、全国的にも有数の大木です。天に手を広げたような枝張りの、その堂々とした姿には誰もが圧倒されることでしょう。

昔、ここには大木神社があったといわれ、幹のそばにはお詣り用の社があり、細い参道を通ってのみ、長太の大楠と社に近づくことができます。夏の水田や、秋の稲穂など、まわりの風景と響き合い、四季折々の姿を見せてくれることでしょう。



幹のそばにはお詣り用の社

※平成 25年(鈴鹿市)

地蔵大マツ

じぞうおおまつ

鈴鹿市内の静かな住宅街のなか、きれいに整備された広場に、地蔵大マツと呼ばれるクロマツの巨樹が立っています。昨今では、多くのマツの大本が枯れるなかで、元氣な姿を見せる地蔵大マツは、貴重な存在となっています。

地蔵大マツの伝説は、大陸から日本に仏教が伝来した飛鳥時代までさかのぼります。崇仏派の蘇我氏が、排仏派の物部氏との争いに勝利したことにより、以後、仏教以外の礼拝が禁じられました。当時この地の人々は、古来より地蔵菩薩を深く信仰していたため、礼拝していた石像をそばの堀に埋めました。そしてこの場所を後世に伝えるため、目印として小さいマツを植えたとされています。地蔵大マツが、人々の信仰の支えとして生き続けてきたことを彷彿させます。

地蔵大マツにまつわる言い伝えは、ほ

■お問い合わせ

鈴鹿市文化財課

☎059・3882・9031



勇壮な姿を見せる地蔵大マツ

かにもあります。享保17（1732）年に、この地に大干ばつが起きました。水を得るため、マツの近くの湿地を掘り起こしたところ、地蔵菩薩が出土し、その下から水が湧き出て田畑を潤したそうです。それ以来、人々は感謝の思いをこめて、マツのそばに地蔵堂を建て、祀るようになりました。この頃から、地蔵大マツと呼ばれるようになったといわれています。

今は地蔵堂の横に東屋が建てられ、地域の人たちの憩いの場になっています。



巨樹のそばには東屋と地蔵堂

す。幹の太さは6.7メートルあり、地上の少し上から大枝を四方に伸ばしています。さらにそこから枝が分かれ、大小約30本の鉄の支柱が枝を支えています。その立派な枝張りを見張るものがあり、マツとしてはあまり類を見ない巨樹とされ、堂々たる姿で今も人々に慕われ続けています。

※平成8年（鈴鹿市西玉垣町自治会）

季節ごとの風景が楽しめる県内最大のイチヨウ
宗英寺のイチヨウ

そうえいじ

《三重県鈴鹿市南野町44乙》

■お問い合わせ

亀山市地域観光課

☎0595・961・2115

JR亀山駅から程近い住宅地に、県内最大のイチヨウがあります。場所は宗英寺の境内。道路からでもよく見えますが、道が狭いので境内の駐車場に車を停めるといいでしょう。

樹齢は約600年と推定され、樹高



イチヨウ寺と呼ばれるほど有名※

は約40メートル。これだけの大本に育った理由の一つに、地下水が豊富にあるからといわれています。イチヨウに近づいて幹をよく見ると、鍾乳石のような形をしたものが垂れ下がっています。これは気根といって、地表に出ている幹から、根が空気中に伸びたものです。イチヨウに現れる気根は、大気中で木の呼吸を助ける機能を持っており、樹齢100年以上の木に現れるものと。大木として育った様子

を物語っています。

イチヨウは落葉前に葉が黄色に染まる美しさから、短歌や俳句によく詠まれます。宗英寺のイチヨウも、伊勢亀山藩主・板倉勝澄の一代記を書いた小説『五重の塔』（大塚雅春・著）のなかで、勝澄が8歳のときに城から城下を眺めていると、黄色い葉がひらひら乱舞しながら飛んでいくのを見て目を見張ったという描写があります。亀山城から宗英寺までは約1キロメートルあり、遠くから望めるほどの大木であったことが伺えます。

新緑の季節には葉がこんもりと茂り、宗英寺のイチヨウの旺盛な姿を認めることができます。11月中旬には、黄葉の風景に誰もが足をとめます。なかでも朝日がイチヨウにあたる早朝は、黄色に色づいた葉が黄金色に輝き、息をのむほど美しい姿を見せてくれます。

いつの時代も、季節ごとの風景で、人々の心を癒しています。

※印の写真は取材先から提供していただきました。

霊山寺のオハツキイチヨウ

れいざんじ

街路樹をはじめ、公園や寺社など全国で見かけるイチヨウ。強い耐性を持つことから、気候や土地を選ばず生育する樹木の一つです。全国に分布していますが、伊賀市の下柘植地区に、オハツキイチヨウという珍しい種類のイチヨウがあると聞き、訪ねてみました。

名阪国道「伊賀」インターを降り、南へ車で20分ほど林道を走り続けると、緑深い霊山の中腹に建つ霊山寺に到着します。車を停めて石畳を歩き、さらに石段を上ると本堂が見えました。その右手で本堂を守るかのように佇む大木が、オハツキイチヨウです。

オハツキイチヨウはイチヨウの変種で、葉の上に種子（実）を結ぶのが特徴です。全国でもその存在は数えられるほど。学術的にも興味深い品種です。ほとんどが雌株なので銀杏がなり、秋の訪れを感じさせてくれます。

■お問い合わせ

霊山寺

☎0595・45・4680

霊山寺の歴史は古く、平安時代前期、ここからさらに上った霊山山頂に、最澄によつて創建されたと伝えられています。天正9（1581）年の天正伊賀の乱によつて焼失しましたが、江戸時代に現在の地で再興されました。霊山寺のオハツキイチヨウは、樹齢が300年



山の中で存在感を放つオハツキイチヨウ



山間の山寺、静寂な境内

以上と推定されています。いつの時代からこの地にあったのでしょうか。今では緑多い境内で、ひと際高くそびえ立っています。

霊山寺への訪問は、オハツキイチヨウが黄色に染まる秋のほか、春のサクラの季節もおおすすめです。周辺に植えられた約500本のソメイヨシノが、静かな山を華やかに彩ります。また、境内の奥には霊山山頂への登山口があり、境内や登山道で石仏群を見ることがもできます。珍しいイチヨウとともに、静かな山寺の風情や歴史に触れてみましょう。

日本で2番目に大きいムクノキ

むくもとおおむく

椋本の大椋

〔三重県津市芸濃町椋本0602〕

■お問い合わせ

津市芸濃総合支所地域振興課

☎059・266・2510

安濃川を見下ろす小高い地、光月寺の南側に樹齢1500年以上といわれるムクノキの巨樹があります。昭和9年に国の天然記念物に指定。昭和63年に行われた「緑の国勢調査」では、ムクノキのなかで全国2位の太さと認められました。平成2年には「新日本名木100選」にも選ばれています。

大椋は玉垣で囲まれており、裏にまわり込むと、大きなキズ跡を見つけることができます。これは明治3年の暴風雨により、幹のように太い枝が折れた跡です。もしこの枝が折れていなければ、今の倍以上の太さがあり、素晴らしい巨樹であったと思われます。折れた枝は、当時の神職が「そのままにしておくのは忍びない」と、枝で獅子頭をつくり、近くの椋本神社に奉納しています。

樹齢が長いだけあって、この木にまつわる伝説も多く残ります。平安時代



風雨に耐えて生き抜いてきた椋本の大椋

勢攻めの際に、このあたりを治めていた北畠氏の臣下が、織田勢の滝川一益に追われ、この巨樹の影に隠れて助かったといわれています。

遠い昔からこの地に根を下ろし、風雨に耐えて生き抜いてきた椋本の大椋。その威厳に満ちた姿で、歴史のなかで人々の拠りどころとなってきました。今でも大椋の前に立つと、その存在感に圧倒されますが、同時に安らぎを覚えることでしょう。

みずや
水屋神社の大楠■お問い合わせ
松阪市文化課

☎0598・53・4393

松阪市内から奈良県境の高見峠に向けて、国道166号線を走っていくと、左側に巨大な赤い楠が現れます。水との関わりが深い水屋神社の目印です。境内に足を踏み入れると、そこは木々が鬱蒼^{うつそう}と生い茂る巨樹の森。所々に立つ大木が、その存在を示していました。水屋神社のなかで最も大きい大楠は、本殿の裏にそびえ立っていました。



根が裾野のように広がる楠

幹まわりは1380センチメートルあり、三重県で2番目の太さを誇ります。樹齢1000年以上ともいわれ、しっかりと根を張る様子がひと目でわかるほどの堂々とした立ち上がり、風格が感じられます。樹高は39.5メートル。途中で三股に枝が分かれ、そのまま勢いよく空にのびていく姿は荘厳^{しょうげん}の一言。木のたもとには赤い神祠^{しんし}があり、「春日さ



巨樹が多く凛とした空気が漂う境内

まと京都の伏見稲荷さまをお祀りする」と書かれた札が立っていました。大楠が御神木として、人々に崇められてきたことを表しています。

水屋神社は、春日神社の流れを汲む由緒ある神社です。創建は1000余年前、大和の春日大社の安在所として、日本神話に登場する天児屋根命^{あめのこやねのみこと}（春日権現とも呼びます）を奉斎^{ほうさい}したとあります。その由縁もあるのでしようか。大楠は両脇に、神の使いの鹿になぞらえたカゴノキ（鹿子の木）を従えています。境内をまわると、大楠以外にも立派な巨樹が多いことに驚かされます。本殿前で参拝者を出迎える樟や、本殿脇に立つ二号楠や水屋の大杉。平成15年には、地中から直径3メートル余りの大ケヤキの切り株が見つかっています。

悠久の時を経て、今も緑あざやかに葉を繁らせる巨樹の森。そこは、揺るぎない時の重みと安らぎに満ちていました。

※書籍「三重の巨樹・古木」より

薬園跡に残る

にしむらひろよし

〔三重県多気郡多気町相桐491〕

西村廣休宅跡のフウ樹

■お問い合わせ

多気町教育委員会

☎0598・38・1122

相可高校に近い住宅街の一角に、スクツと立つフウ樹。新緑の季節は、手のひらのような形の葉が青々と茂り、秋になれば黄色や赤色に染まります。

この場所は、江戸時代後期の豪商で、著名な本草学者でもあった西村廣休の薬園跡です。自宅内に薬園を設けて、2000種類近くの植物を栽培し、研究していました。このフウ樹も薬園にあった樹木の二つで、彼の功績を記念して残されています。フウが台湾や中国から渡来したのは、享保年間（1716年～1735年）の中頃。樹齢が約200年と推定されているため、この木も比較的古いものです。幹から採取した樹脂は、薬用として使わ



季節ごとの景観を見せる落葉高木

れています。人々の役に立っていたフウ樹は、現代では町を潤す景観として親しまれています。

朽ちても成長し続ける老木

まつしたやしろ

〔三重県伊勢市巨勢松1346〕

松松下の大クス

■お問い合わせ

伊勢市文化振興課

☎0596・22・7884

国道42号線を南下し、二見興玉神社を越えて5分ほど走ると、氏神さまを祀る松下社があります。隣にある民話の駅「蘇民」が目印です。鳥居をくぐり奥へ進むと、不思議な形をした巨樹が、囲いのなかで幹や枝をのばしていました。

主幹は地上5メートルほどを残して、そのほとんどが朽ち、さらに大きく空洞ができています。それでも残った部分から幹や枝が張り出し、葉を茂らせ、その姿は堂々たるもの。樹齢は2000年ともいわれており、その様子からも、老木と呼ぶにふさわしい威厳を保っています。松下社には、神様にひと晩宿を貸したという、伊勢地方では有名な蘇民将来伝説が残ります。神にまつわる説話が、大クスの風格をさらに高めています。



蛇がうねるように、幹や枝がのびる

山あいの静かな集落に立つ だいえんじ 大淵寺のスダジイ

宮川ダムから少し下流の山あいに、県内で生育するスダジイのなかでも有数の大樹があると聞き、訪ねてみました。松阪方面から宮川沿いをひたすら車で走ると、最も上流の集落にたどり着きます。スダジイの大樹は、宮川の谷を見下ろす斜面の高台、大淵寺の境内に立っていました。樹高は約20メートル。まわりに木々がなく、墓地の近くに1本だけ立っているため、実際よりも大きく見えます。

樹齢は300年以上といわれ、天正13（1585）年に大淵寺がここに移される前から立っていたと思われます。当時の記録によると、宮川の川べりにあった大淵寺が焼失し、この土地に移ってきました。その後、台風によってある大樹の枯木が倒れて本堂を壊し、8年後に再建されたとあります。こうした記録から、当時この近辺は大樹の森で、スダ

ジイはその生き残りだと考えられています。なぜこのスダジイだけが残ったのかはわかりませんが、しっかりと大地に根を張り、上へ横へと伸びる枝ぶりに、力強い生命力を感じずにはいられません。

スダジイは、こんもりとした樹形が特徴です。大淵寺のスダジイも樹齢が長いだけあり、幹に近づくとすっぽりと枝葉に覆われ、木に守られているような安心感があります。実（ドングリ）は、数あるドングリの種



新緑の季節には、葉が重なり合いボリュームのある樹形に

老木の深いしわが歴史を語る

（三重県北牟婁郡紀北町長島1406-1）

ながしま 長島神社のクス

長島神社へは、紀勢自動車道・紀伊長島インターから海をめざし、東長島南の交差点を右折して国道42号線に入ります。長島トンネルを抜けたらすぐに左折。少し走ると、家並みの背後にある高台に目的の神社が建っていました。

車を停めて見上げると、鬱蒼と生い茂る木々の合間に、高く積み上げた石垣や社殿が見えました。長島神社の創始については明らかではありませんが、社名や場所については、古来より変わらず存続してきたと伝えられています。境内の木々も、同じように時を越えてきたのでしょうか。クスをはじめ



歴史を感じさせる太く深いしわ



高く積み上げた石垣や社殿

め、イヌマキ、ヒノキ、スダジイ、スギなど、かなり大きい樹木が目立ちます。長島神社の社叢（境内に密生する林）は、自生によって成り立つ貴重な暖地性植物群落として、県の天然記念物に指定されています。

それ以上のボリュームを感じます。この大クスの幹には、樹皮に何本もの深いしわが入っています。長い年月を経た証拠で、老木に見られる特徴です。樹齢は推定1000年。幾多の時を生き抜いた強さを目の当たりにし、畏敬の念を覚えるほどです。ほかにも、成長しながらまわりの植物と同化する様子も見られます。根元から一緒に生えているツバキは、花を咲かせる年もあるそうです。

郷愁を覚える漁師町の風景、緑深い境内に身をおき、老木が持つパワーを感じてみませんか。

■お問い合わせ

紀北町教育委員会

生涯学習課

☎0597・46・3125

尾鷲神社の大楠

おわせ

■お問い合わせ
尾鷲神社

☎0597・22・1486

紀勢自動車道・尾鷲北インターからまっすぐ海へ向かうと、道路の横に立つ巨樹が目にとびこんできます。幹が大きく傾き、道路にせり出している様子は圧巻のひとつです。その巨樹は、尾鷲神社の境内に立っていました。

近づいてみると、2本の楠が5メートルほどの間隔で並んでいます。枝が互いに重なり合い、一つの樹冠を形成しているのが、1本の木のようにも見えます。別名「夫婦楠」とも呼ばれ、南側の雄楠は目通り幹まわり（目の高さでの直径）が10メートル、北側の雌楠は9メートル。どちらも樹齢1000年以上と推定される、県内屈指の堂々とした巨樹です。寛永13（1636）年に紀州藩が大本の調査を行ったときには、幹まわりはすでに5.7メートルあったと、「改め帳」に記されています。

雌楠には大きな瘤があります。この

瘤に触ると跡取り（男子）が授かるという言い伝えがあり、昔から夫婦円満・子宝授け・良縁結びの御神木として親しまれてきました。最近ではその縁起を授かるうと、遠方からも多くの人が参拝に訪れています。



道路に大きくせり出す大楠



尾鷲神社の境内

この大楠は、大災害にも耐え抜いた貴重な巨樹です。宝永4（1707）年の大地震では、大津波によって付近は壊滅的な被害を受け、尾鷲神社の本殿も流されてしまいました。当時、本殿は大楠の横に建っており、この巨樹だけが生き残ったのです。また、昭和41年には、腐つてできた幹の空洞に火が入り、3日間燃え続けたとのこと。何度も危機を乗り越え、その逞しさを多くの人が称えたことでしょう。2本の大楠が支え合いながら、時を重ねていくことを願うばかりです。

美しい砂浜の近くに立つ「重原熊野市新鹿町」の徳司神社の大クス

おわせ

■お問い合わせ

熊野市教育委員会社会教育課
☎0597・89・4111
内線418

国道311号をはさみ、新鹿湾と面する場所に徳司神社があります。道路沿いの鳥居を抜けると、石段の向こうに小さな社が見えます。宝永4（1707）年の大津波により古い記録が流されたため、神社の起源は不明ですが、境内に巨樹が多いことや石積などの様子から、古くからこの地で漁村を見守ってきたと思われる。

境内には、スダジイ、オガタマノキなどの大木が立ち並び、見事な社叢を形成しています。その代表格が、本殿への石段の横に立つ大クスです。樹高は28メートルあり、荒々しくのびた枝が社殿を覆う姿は、この神社を



本殿への階段の左側に立つ大クス

守っているようにも見えます。石段の下にも根を張り、どっしりと構える様子も見ものです。

神の力が宿る地「重原熊野市安産町神内」の神内神社のホルトノキ・クス

おわせ

■お問い合わせ

神内生き活き協議会
☎0735・3321274

のどかな山里にある紀宝町・神内地区に、安産祈願の縁起で知られる神社があります。近くの森に伊弉諾尊・伊弉冉尊が天から降り、一男三女をもうけたとの由緒から、古くから「子安の宮」と呼ばれていました。鳥居をくぐるとすぐ左手に、何本もの根がからんだようなホルトノキの巨樹があります。近づいて根元を見ると、大きな石を根が巻き込んでいる様子。年月をかけて今の姿になり、わが子を抱いているように見えることから「安産樹」と名がつけました。その姿には安らかな趣が漂っています。

神内神社の御神体は、薄暗い参道を奥に進み、さらに長い石段を上った先にあります。自然岩の岩窟（高さ約100メートルの巨岩）を御神体とし、古の自然崇拜のありさまを今に伝えています。



根元で大石を抱く「安産樹」

三重県スポーツ吹矢協会（津中央支部）

スポーツ吹矢は日本で生まれた新しいスポーツです。吹矢はこれまで遊戯とされてきましたが、平成10年に日本スポーツ吹矢協会が設立され、スポーツ吹矢として生まれ変わりました。平成20年には津中央支部が発足。約60名の会員が、主に健康維持を目的として楽しんでいます。



三重県スポーツ吹矢協会 会長
にしかわ みのもる
西川 稔さん

お問い合わせ

携帯 090-3568-9257

三重県内で活躍するグループを紹介する「いま、グループネット」。今回は、津市の「三重県スポーツ吹矢協会 津中央支部」を紹介します。仲間との交流を楽しみながら、心身ともに健康をめざすスポーツ吹矢の魅力を、代表の西川 稔さんに伺いました。

―スポーツ吹矢について、教えてくださいませんか。

西川：吹矢は、古来は狩猟に、現代では遊戯に使われていました。最近になって用具やルールが統一され、ゲーム感覚で楽しめるスポーツになりました。120センチメートルの筒に矢を入れて、5から10メートル先の的をめがけ息を使っ

て矢を放ちます。的当てを競うだけでなく、礼から始まり礼に終わり、所作もきちんと定められています。新しい国民的スポーツとして、国体のデモンストラーション競技にもなっています。

―まるで武道のようですね。矢を吹くのにコツはありますか。

西川：はい。決められた所作を行いながら9秒かけて息を吐出し、そのあと大きく息を吸い込んで息を止め、一気に吐き出して矢を放ちます。スポーツ吹矢は腹式呼吸が基本ですが、最後は胸式呼吸を使います。呼吸法が要のスポーツなので、健康に良いとされています。

―西川さんご自身、健康面で実感されていることはありますか。

んそくが楽になった」と話す人もいます。私自身も、背筋や腕を伸ばして行うことで、普段の姿勢が良くなったと感じています。

―健康に役立つスポーツですね。支部の活動の様子を教えてくださいませんか。

西川：津中央支部には、60・70才代の約60名の会員が所属しています。主に毎月第1・3日曜日を中心に、津市西部市民センターで活動しています。皆さん、健康維持を目的に通っています。なかには大会にチャレンジする人もいます。秋に開かれた全国大会には、2名の会員が県の代表として出場しました。三重県内の支部が集まり、交流も兼ねて大会を開くこともあります。

―競技としての側面を感じますね。

西川：はい。統一されたルールがあり、成績も残る競技ですから。ほかにも、実力の向上をめざした段級位制度があります。5級から7段まであり、段位が上がるのとまでの距離がのびるので、目標を持って練習する人も多いです。



姿勢を整え、的を狙い集中する



練習に集まった、津中央支部の皆さん



地元小学校のクラブ活動にも取り入れられている



的までの距離は、段位によって決まる

3段以上になると、公認指導員の資格認定試験を受けることもできます。この支部でも、地元の小学校のクラブ活動でスポーツ吹矢を教えている会員もいます。

―目標が持てて、やりがいがありますね。

西川：そうですね。大切なのは皆で楽しむことです。私たちは、おしゃべりを楽しみながら、健康維持を一番の目的に活動しています。県内には障がい者のグループも多く、年齢や運動能力に関係なく誰でもできるスポーツなので、多くの方に体験してもらいたいですね。

―ありがとうございます。何歳からでも始められて、健康面や生きがい、仲間づくりにもつながるスポーツ吹矢。これからの社会のなかで、さらなる発展が期待されます。



伊賀焼伝統産業会館ギャラリー



名品にも出会える伊賀焼伝統産業会館

さらに進むと右手に、水色の壁が目を引くジャンティペイクがあります。大正時代の木造建築を改築したカフェ&ギャラリーです。レトロな雰囲気空間に、伊賀焼の器がいくつも並べられています。ジャンティペイクがある交差点を南へ行くと、窯元のひとつ長谷園があります。ここでは、国の登録有形文化財でもある16連房旧登り窯が見学できます。昭和40年代までは、この16の焼却室を15〜20日間焚き上げて伊賀焼を大量生産していました。この大きさ(16連房)で現存する登り窯は、日本ではこれだけだといわれています。窯に火が入り、伊賀焼がく

江戸・昭和時代に活躍した 圧巻の16連房旧登り窯

工程、歴史を紹介する展示のほか、各窯元の作品が展示販売されています。陶芸教室も開かれていますので、旅の思い出に自分だけの器をつくるのも楽しみの一つです(要予約)。



長谷園旧事務所・大正館(休憩スペース)



レトロな雰囲気のジャンティペイク

茶陶から受け継がれた 伊賀焼を知る

名阪国道「壬生野」インターチェンジを降り、県道49号線を阿山・信楽方面へ進みます。左側に丸柱への案内標識が見えてきたら矢印(県道674号線)に従いしばらく走ると、田園が広がる集落・

丸柱に着きました。右手に丸柱郵便局を見ながらそのまま進み、「丸柱」の信号を左に折れて行くと、白壁の伊賀焼伝統産業会館があります。ここで伊賀焼を知ることから、今回の旅ははじまります。伊賀焼の歴史は古く、奈良時代までさかのぼります。桃山時代に「侘び茶」が広まると、個性的で意匠性の高い伊賀焼

は、茶の道具として注目されるようになりました。江戸時代(18世紀中頃)になると、土鍋を中心に日常雑器がつくられるようになります。それは、遠い昔に琵琶湖だったこのあたりの陶土が、火に強い特性をもち、土鍋に適しているからです。伊賀焼伝統産業会館では、現代や昔の生産

再発見

伊賀焼の文化を受け継ぐ 時を経ても美しい山里 伊賀市 丸柱

ふるさと再発見の第二十四回目は、伊賀市丸柱です。伊賀市の北西部に位置するこの地区は、四方を山に囲まれた静かな山里です。伊賀焼発祥の里ともいわれ、今も30の窯元が点在し、昔と変わらず、伊賀焼はここ丸柱を中心につくられています。また、徳川家康が伊賀越えをした経路にもあたり、歴史的にも興味深い地。今回は、自然の中で育まれた伊賀焼の文化や、歴史をたどりながら、ゆったりと時間が流れる山里の魅力を紹介していきます。



で、塩漬けにした魚(このしろ)の腹にご飯を詰めて発酵させた熟鮓が奉納されます。参道では陶製のこま犬が参拝客を迎え、ここが焼きものの里であることを思い出させます。

歴史の足跡が残る里で 現代作家の作品に触れる

来た道を戻り、そのまま道なりに行く
と、丸柱に着いたときの広い道に突き当たります。丸柱郵便局が正面に見えるので、その角を左に折れ、「丸柱」の信号を越えると右手にギャラリーやまほんがあります。ここでは、「生活の中で愛でられるもの」をテーマに集められた、器や絵画、洋服、オブジェなどにあらゆるジャンルの現代作家の作品を見ることが出来ます。敷地内のカフェノカにも、キッチン用品などの身近な暮らしの道具が並べられています。

最後の目的地は徳王寺です。丸柱郵便局



View Point 天保三年(1832年)創業時からある、迫力のある長谷園の16連房旧登り窯



山の傾斜に沿って建てられた佐々神社



道路から少し下の場所に佇む、みの石地藏



長谷園主屋は、風格ある木造建築

便局まで戻る途中の、小高い丘に建っています。「本能寺の変」において、堺にいた徳川家康が伊賀越えをして岡崎に戻る途中、この地で休息をとったことから、徳の二字を拝領したと伝わっています。春になると、参道の石段に桜の花びらが舞い散る風雅な趣を楽しむことができます。伊賀焼のふるさとを巡る旅もここです。毎年5月2日から4日には「新緑伊賀焼陶器市・窯だし市」、秋には「いがやきまつり」が開催されます。窯元の作品が一同に集まるこの機会に、美しい原風景が残る山里を訪ねてみるのもいいでしょう。



春は野点茶会が開かれる徳王寺



ちょっと足を延ばして

音羽氏城跡 (おとばしじょうせき)

佐々神社近くの丁字路を東へ少し進むと、音羽氏城跡への登り口があります。ここから徒歩で山を上がると、音羽氏城跡があります。自然の地形を巧みに利用した城造りの様子が残る貴重な城跡で、戦国時代の城の姿を今に伝えています。



石垣が残る音羽氏城跡※



ギャラリーやまほんには、現代作家による暮らしの道具が並び

がわかる貴重な建造物です。内部公開は年に数回ですが、門から見える玄関までの立派な造りや、厚みのある重厚な茅葺屋根は、外からでもよく見えます。

**この地を見守り続けた
地藏さまと由緒ある神社**

伊賀焼の魅力に触れたあとは、丸柱の歴史をたどりましょう。来た道をそのまま進み山へ上っていくと、左手に「みのいしじょう」と書かれた木の看板がありました。みの石地藏は、杉の根本にある石に直接彫られた磨崖仏です。杉の根が地藏の裏のように見えることから、その名が付いたと伝えられています。昔、ここを行き交う人が手を合わせていたのです。

さらに進むと、丁字路に突き当たり、その手前の右手に佐々神社があります。子宝・授乳などのご利益があり、毎年12月10日には「このしろ祭り」が行われています。300年前から続く伝統ある祭礼

市・町のシンボル

尾鷲市

三重県内の市町が、それぞれの特徴を象徴する存在として選定している木・花を紹介します。



市の木
ヒノキ



市の花
ヤブツバキ

■ お問い合わせ ■

尾鷲市役所 政策調整課 秘書広報係 TEL 0597-23-8132

*ご愛読いただいていた「三重彩時記」を202号からリニューアルしました。

*市・町名の50音順に紹介しています。

*シンボルを選定していない、もしくは鳥や魚などを選定している市町も一部あります。

表紙写真 長島神社のクス

百五銀行 丸之内本部棟内の「歴史資料館」で、「すばらしき“みえ”」のバックナンバーをご覧ください。

図 経営企画部広報CSR課 TEL 059-223-2326(要予約)